

2021年5月9日～5月15日 各家庭でのディポーション用テキスト

## ■病気による訓練（3/3）

私たちが病気になる場合、その原因が自分自身にあるのではなく、「敵」によってもたらされることもある。病気の原因をたどろうとするとき、確かに私たちは未知の不可解なものを調査しているのであるが、時には「敵のやったことです」と言う以外、説明がつかないように思われることがある。あの「潔白で正しく、神を恐れ……る」ヨブ（ヨブ1:8）の上にふりかかった恐怖の跡をたどってみよう。このヨブに、彼をのみ尽くすようなひどい病気がもたらされた。それは、神の窮めがたい摂理のうちに、神によって許容されたものである。なぜなら、力に満ち、あわれみに富む方は、誘惑者の嘲笑に対して、「では、彼をおまえの手に任せる。ただ彼のいのちには触れるな」と答えられたからである（2:6）。結果は直ちにあらわれた。「サタンは主の前から出て行き、ヨブの足の裏から頭の頂まで、悪性の腫物で彼を打った」（7節）。ヨブの苦しみがあまりにも大きかったので、友人たちは「七日七夜、地にすわっていたが、だれも一言も彼に話しかけなかった」（13節）。

病気は、すべてが罪の結果であるとはかぎらないように、すべてがサタンによるものであるともかぎらない。しかし聖書は、病気が「悪しき者」によってもたらされることがあることを、くり返し語っている。ゲラサの地に、世人から捨てられた不幸な人がいた。その人は、悪霊につかれて精神病にかかっていたが、悪霊が追い出されると、「着物を着て、正気に返って、すわっていた」（ルカ8:35）。またガリラヤの女について、主は、「この女はアブラハムの娘なのです。それを十八年もの間サタンが縛っていたのです。安息日だからといってこの束縛を解いてやってはいけないのですか」と言われた（13:16）。主のお働きについて、「このイエスは、……悪魔に制せられているすべての者をいやされました」と言われている（使徒10:38）。またパウロの「肉体のとげ」がどんなものであったにせよ、それはパウロを打つ「サタンの使い」なのであった（Ⅱコリント12:7）。

病気の原因を識別することも、病気における訓練の一部である。ただし短気な不信仰な態度でそうするのではなく、神からの知恵をもってすべきである。もし病気が自分自身の罪の結果であるなら、その罪を心から悔い改め、自分の道、自分の

日々を、神にゆだねなければならない。私たちの時は神の御手のうちにある（詩篇 31:15）。もしサタンが原因であるなら、反抗し、拒否し、主イエスの力ある御名によって救い出されるようにしなければならない。病気の原因が何であるにせよ、私たちは、その苦しみも弱さも、「生きるにしても、死ぬにしても」（ピリピ 1:20）神の栄光があらわされるためのものとなりうるということを、信じなければならない。

病気は確かにきびしく訓練するものである。その苦しみの下にある者だけが、その訓練の深さを知ることができる。病気による弱さとむなしさ、倦怠と苦痛、涙と試み、長い昼、それよりもさらに長い夜は、私たちを深い憂うつの中に投げ込むこともできれば、「わたしの恵みは、あなたに十分である。というのは、わたしの力は、弱さのうちに完全に現われるからである」（Ⅱコリント 12:9）という主のみことばを、私たちに知らせることもできる。私たちはパウロと同じように、キリストの力が私たちに宿るように、むしろ、喜んで自分の弱さを誇ることを学ぶことができる。

この訓練を恐れないようにしよう。またそれに打ち負かされないようにしよう。この試練によって、自分の心を探り、まだ言いあらわしていない罪があるかどうか反省しよう。この試練によって、私たちの障害がたましいの敵によってもたらされたものであるかどうかを明らかにしよう。それは、私たちが罪から救い出されるためである。この試練によって神の栄光をあらわすことができ、神の恵みが十分であることを見出すことができるのだという輝かしい真理に、この試練を通して立つ者となろう。病気によって訓練されてこそ、多くの人々に神のあわれみと恵みを分かち与える者となることができるのである。

いつくしみ深き 友なるイエスは  
罪とがうれいを とり去りたもう  
こころの嘆きを 包まず述べて  
などかは下ろさぬ 負える重荷を

いつくしみ深き 友なるイエスは  
われらの弱きを 知りてあわれむ  
悩みかなしみに 沈めるときも  
祈りにこたえて 慰めたまわん

讚美歌 312

【V・レイモンド・エドマン 人生の訓練 第二十四章「病気による訓練」より】  
※この本は図書に置かれています。さらに読みたい方はどうぞご利用下さい